初期毛沢東のロマンティック・フェミニズム

——趙女士自殺事件をめぐる論争について——

中前吾郎

一　はじめに
二　社会への反逆
三　ロマン的恋愛
四　婚姻制度改革
五　おわりに

一　はじめに

一九一九年一一月一四日長沙、一人の花嫁が自殺するという事件が発生した。南陽街の眼鏡店趙家の長女五貞（二二歳）は、柑子園の骨董業呉家への嫁入りが決まっていたにもかかわらず、輿入れの当日になって、嫁ぎ先に向かう輿の中、首筋を剃刀でかききり自殺したのである。[1] 父趙海楼の述べるところによれば、趙五貞は南門外の劉家に嫁いで一男一女をなしたのち寡婦となっていた。料理・裁縫が得意で、また書も読めた。父母の心を体した孝行娘であったため、父母も掌中の玉のようにこれを愛し軽軽には配偶者を選ばず今年に至ったのである。前年に妻をなくした呉五（三〇歳）との婚姻を取り決めると、趙五貞は初め塡房（後妻）になるのを嫌ったが、再三なだめてからは異存もなく結婚の日取りが決まっても不満を表わさなかった。しかし、ここで呉家についての噂が立ち起こってきた。いわく、新郎はまがいものの真珠を売った罪でいま獄中にある。いわく、姑は口論から相手の手を咬み切るほどの凶悪な人である。いわく、新郎は歳五十をこえ容貌が醜い。この噂を聞いた趙女士は結婚の延期を願っていた、と。[2] あるいは、結婚を嫌がる趙五貞を父母は打ち罵ったともいう。[3] ここにいたって趙五貞は決死の覚悟をしたのである。趙女士自殺の原因について真相は不明である。巷間、次

の三説が流れた。一つは、趙女士の名誉を傷つけるもので根拠のない話という。二つには、結婚前に自殺したのは再嫁を拒み貞節を守ったのである（あるいは死んではおらず逃げ去ったともいう）。三つには、これが最も多数を占めたのであるが、呉家に嫁ぐことを嫌ったのである、と。真相の定かでない事件に論議は論議を呼ぶ。論議の焦点もまた真相が不明なぶん自由に求められることになる。

同月八日に湖南『大公報』紙の館外選述員となっていた毛沢東は、事件発生の翌々日、一篇の評論を『大公報』「研究」欄に寄稿し読者の議論を喚起した。こうして、趙女士自殺事件をめぐる論争が同紙においても発生し、毛沢東自身は一六日から二八日までの間に九篇の文章を書いている。また毛沢東は、周南女校学生会出版の『女界鐘』にもこの事件について一篇の文章を書いている。趙女士自殺事件に関するこれら毛沢東の文章からその女性論を検討した研究もすでにあるが[4]毛沢東の文章を論争の中で捉えるという観点は資料上の制約もありこれまで見られなかったように思われる。本稿の目的は、毛沢東の文章を論争の中に置き入れて捉えること、いいかえれば論争中に現われた他のどのような意見に触発されてどのように毛沢東が議論を展開させたのかを検討することによって、その思想の内部構造と作動原理を考察し、女性解放（フェミニズム）についての毛沢東の思想的立場を明らかにすることにある。[5]

二　社会への反逆

『大公報』「研究」欄において展開された趙女士自殺事件論争の口火を切ったのは、事件翌々日の一六日に掲載された毛沢東の論文「趙女士自殺に対する批評」であった。毛沢東は、事件翌一五日の「随意録」欄に表わされた天籟と兼公の所説をひきつぐ形で自説を述べている。

天籟は、趙女士の自殺の意図について、「生命を犠牲にして一切の現在・未来の苦悩から解脱することを図る」、いわば世界苦からの生命を賭した離脱があったことを述べ、自殺の惨劇をもたらした原因をひとえに旧式の婚姻制度に帰している。[6]兼公もまた、二度と再び子女の婚姻には干渉しないという「徹底の覚悟」をもつべきことを訴えると同時に、趙女士は「一面では不自由な結婚の犠牲者となったけれども他面さらに婚姻制度改革を警動する犠牲者ともなった」と述べ、その死の価値あることを婚姻制度改革に結びつけて認めていた。[7]このように、天籟と兼公は、趙女士自殺事件をただちに不自由な婚姻制度の現状と結びつけて論じたのであった。

毛沢東は、「昨日、天籟先生と兼公先生がすでに端緒をなした。私はとくにひきついで一つの意見を発表する」と天籟・兼公の所説をひきつぎ、「討論に熱心な人は、この一人の、自

由に殉じ恋愛に殉じた女青年に対して、各種の論点から出発し、彼女に替って『冤枉』を叫ぶことを希望する」と読者から多様な議論が湧き出ることを期待している。[8] 毛沢東は、今回の事件の背後には「婚姻制度の腐敗、社会制度の暗黒、意想の不独立、恋愛の不自由」があると述べている。したがって、展開されるべき議論は毛沢東にとって婚姻制度の問題のみには限られていなかったと思われるが、毛沢東自身はまず趙女士の置かれた「環境」「社会」に議論の照準を合わせた。

毛沢東によれば、「一個人の自殺はまったく環境によって決定される」。そして、趙女士の環境は、中国社会、母家（長沙南陽街の趙家の家族）、夫家（長沙柑子園の呉家の家族）の「三面の鉄網」であり、この環境のために求生が本意であった趙女士も死を求めざるをえなかったのである。もし仮にこの「三面の鉄網」のうち一面でも開かれていたならば、趙女士は決して死に至らなかった、と毛沢東は述べている。すなわち、父母が趙女士の自由意志に従っていたならば、あるいは、父母の強迫があったとしても趙女士の意志が夫家に達し夫家がその意志を尊重していたならば死ななかったであろう、と。また、父母や夫家が趙女士の自由意志を許容しなかったとしても社会に世論と支援があれば趙女士は逃亡することができ、この逃亡は名誉でもあるだろう、と。このように、毛沢東は、天籟、兼公とは異なり、趙女士自殺の原因を環境に求めたのであった。

この毛沢東の議論に対して、一七日兼公も「自殺は個人の罪悪ではなく環境の罪悪」であり、自殺の「源を絶つ方法は環境を改造することである」と応じてはいるが、趙女士の例に見るような婚姻にかかわる自殺に限って言えば、「源を絶つ方法は、婚姻制度を改良し、結婚の自由を実行すること」、すなわち自由意志の障害となっている旧式の婚姻制度を改革することなのであった。[9] しかし、毛沢東の場合には、問題の焦点はあくまで環境にあった。それは、自由意志の問題とからめて趙女士の人格について論じる際にも現われ、ここではとくに西洋との比較を踏まえた議論を行なっている。

毛沢東は一八日、論文「趙女士の人格問題」において、趙女士に人格があったか否かの問題について否定と肯定の両様の説明を行なっている。[10] 毛沢東はまず趙女士に人格はなかったと言う。毛沢東は、「人格というものは相手の尊崇によって存在する」という大前提から出発し、人格の根本的条件ともいえる自由意志が父母によって尊崇されていたならば趙女士の自殺はありえないと述べる。しかし、事実として自殺が発生した以上、趙女士に人格はなかったということになる。ここで毛沢東は、西洋と中国の家庭制度を比べて次のように述べている。「西洋では、一個人の父母とその子女の意志の自由は影響を生じない。西洋の家庭組織では、父母は子女に自由

意志のあることを承認している。中国はそうではない。父母の命令と子女の意志はまったく両立しない」と。そして、相手の願わない恋愛を迫ることは「直接強姦」であり、子女に恋愛を迫ることは「間接強姦」である、と述べている。[11] このように毛沢東は、子女の自由意志を認める西洋社会と比べて、それを認めない中国の家庭制度が生み出す婚姻の在り方を間接的な強姦であると言葉きつくも視点するどく批判するのである。すなわち、毛沢東は西洋の個人主義的な婚姻制度に対する意識から、個人ではなく家を生産単位とする農業社会・中国の生み出す家族主義的な婚姻制度[12]を批判している。ここには、近代的な自立した人格を前提とする立場からの中国社会批判があろう。

しかし、そのような近代的な人格が成立しえない中国にあって、趙女士に人格はあったとも毛沢東は述べている。すなわち、二一年間趙女士は人格を認められない家庭の中にあったけれども、その最後の瞬間に彼女の人格は現われきたったのである、と。いいかえれば、いわゆる「自由ならずんば寧ろ死することなからんや」[13]という決死の選択をなしてはじめて人格が存在しうる状況が毛沢東に映じた中国社会の現状なのであった。ここには、自己の置かれた中国という独特の環境に主体的にかかわって発言する毛沢東のもうひとつの意識、すなわち世界苦におけるロマン的な人格の追求があろう。このように、趙女士の人格問題について否定と肯定の両様の説明を生み出す毛沢東の思想の内部構造には、近代的な人格の追求とロマン的な人格の追求という二重の意識があると思われるが、それは「ロマン主義的意識のなかには、すでに近代的・合理主義的なものがとり入れられ、止揚されている」からでもある。[14] したがって、毛沢東の中国社会批判を読み解く際には、この二重の意識に留意しなければなるまい。

このような毛沢東のいわば環境決定論に対して一九日賛否両論が現われた。毛沢東に反対の立場をとる殷柏は、「社会は個人が組み合わさって成っているもので、とりわけ個人の方面を重視しなければならない」と述べている。[15] 趙女士の自殺に関して殷柏は、彼女が自由恋愛を積極的に主張している人であったのか、自殺を免れる機会がなかったのか、の二点について問題提起を行なっている。殷柏によれば、かねてから自由恋愛を積極的に主張し、かつ自殺を免れる機会が全くなかったのであれば環境の罪悪ということになるであろうが、媒酌人から紹介され父母が婚姻を代替するという「習慣上の手続」を経ており、その間、趙女士は強硬に反対する態度も表わしていないし、あらかじめ逃亡を準備することもしていない。したがって、むしろ個人の方面における「惰性ありて判断力なしの罪過」が問題とされるのである。これは、近代的な自立した人格を問題とする立場であろう。

一方、毛沢東に賛成の立場をとる汝霖は、趙女士は婚姻の破棄、期限の延長を果しえなかったのであり、少なくとも不自由な結婚を拒絶しようとする意志は見せていたと指摘している。[16] また汝霖は、毛沢東の「三面鉄網」説に賛成しながらも、社会の鉄網が他の二つの鉄網よりもさらに堅牢なものであると述べている。「父母の命、媒酌の言」の儒教的価値観[17]が社会にあるために、趙女士が自己の名誉を守ろうとすれば犠牲的な手段をとらざるを得なかったのである。これは、近代的な人格が成立しえない社会状況をむしろ重視する立場であろう。毛沢東は、この汝霖の評論を見る前に殷柏の反論に対する再反論を書いたと述べているが、汝霖と同じく社会に対する批判を強める方向で殷柏への再反論を書き、趙女士が逃亡できなかった理由を説明している。

毛沢東は二一日、論文「『社会万悪』と趙女士」において、趙女士の行為は消極的なものであって提唱することはできないとする殷柏の議論に賛成であり、殷柏の主張と自己の主張とは矛盾しないと述べている。[18] それは後述の論文「自殺を非とする」において詳しく表わされることになるが、この論文ではまず、「しかしながら私はとうてい『社会』を大目に見ることはできない」と、殷柏とは異なり社会批判の立場に立っていることを明らかにしている。このように、毛沢東には近代的な人格の追求とロマン的な人格の追求という二重の意識が内部構造として含まれていると思われるが、毛沢東の議論はまず社会批判へと作動する。毛沢東は、「この社会は一種の極めて危険なものであって、趙女士を死なせることもできるし、銭女士・孫女士・李女士を死なせることもできる。『女』を死なせることができ、『男』を死なせることもできる」と、趙女士自殺事件の原因が社会にあると捉えることによって、女性の自殺をひきおこす婚姻問題が単に女性の問題にとどまらず男性の問題でもあることを認識させようとしている。そこで、毛沢東は「社会万悪」の声を高らかに叫ぶのである。

毛沢東は、趙女士に死を迫ったものには母家・夫家・社会の三つの方面があるが、つまるところ母家・夫家は社会の中に含まれ、母家・夫家に罪悪があるとしてもその来源は社会にある、と述べている。ここでも毛沢東は、「もし西洋社会であれば、このような牽強付会の媒酌人制度と人を欺く誣語はない」、また父親の暴力について「かりに西洋社会であれば、たちまち法廷に訴訟を提出し、あるいはついに自衛的な抵抗の方法を採用することができる」と、西洋社会との比較を行なって中国社会を批判している。そして、中国社会には、たとえば行商人が多い（家にいなければ物が買えないということ）、町には女子のための便所がない、理髪店・旅館・茶館に入る女子を見ない、商店に女子店員がいない、女子の車夫がいない、師範学校も男女共学ではないといった「男女の極端

の隔絶」があるために、趙女士は逃亡という手段を採ることができなかったのである、と述べている。つまり、逃亡するとしても何処に逃亡するのか、と毛沢東は問いかけているのである。逃亡したとしても、捉えられ打たれ罵られることになるであろう、と毛沢東は答えている。

しかし毛沢東は、自殺せざるをえない中国社会の状況をこのように表わしつつも、自殺については否定している。二三日の論文「自殺を非とする」において、毛沢東はまず倫理学・心理学・生理学・生物学の各方面から自殺を否定している。[19] すなわち、人は「生」を目的とすると多くの倫理家は主張している（とくに人生の目的を心身の発展におくパウルゼン倫理学説に毛沢東は賛同する）、死を歓迎するのは心理的な異常である、生理的な自然状態に反する自殺は生理的な奇変である、生物界では自殺は非常に少ない、と「求生の法則」が基本であることを説明している。毛沢東は次に、現に社会には自殺があること、壮烈な自殺には尊敬の感情を抱くこと、の二点についてその理由を問いかけていく。毛沢東によれば、本来生を求めている個人は環境の不当な処置によって希望が失われたとき自殺にいたる。したがって、自殺の動機は死を求めることにはなく逆に「激烈な求生」にあるということになる。また、壮烈な自殺は、人のなしえないことをあえて行なった（「難能」）ことと、強権に反抗する精神があった（「反抗強権」）ことの二つの理由によって尊敬される、と毛沢東は述べている。ここには、自殺の原因を個人にではなく社会に求め、自殺を生み出した社会に対する反逆にこそ個人の価値を見い出す、毛沢東のロマン主義的な自我崇拝があろう。

こうして毛沢東は自殺否定の理由を次のような三点にまとめる。①求生を目的とする道に反して死を求めるべきではない。②自殺の条件は社会が希望を奪うことにあるが、社会から希望を奪い返すべく奮闘して死ぬのは「被殺」であって「自殺」ではない。③壮烈な自殺を尊敬する本質的な理由である「難能」と「反抗強権」は自殺以外に方法を求めるべきである。このように毛沢東は、求生の法則に従って、社会の中で主体的に希望を追求するための奮闘、つまり社会への反逆を要求するのである。これは、社会によって剝奪された価値を自ら補完すべく社会内部において対抗権力を追求することを意味する。[20] いいかえれば、自殺という方法ではなく、社会内部における奪闘という方法をとってこそ、伝統的価値観からすれば大罪と言うべき「不孝」にも新しい大義を見い出すことができるのである。それゆえ、毛沢東にとって、自殺は否定すべきものとなる。

さらに毛沢東は、辱めを受けることになる逃亡は屈服に等しい、と述べている。したがって、社会への反逆は、（西洋社会の婚姻制度という外部論理からの影響を受けつつも）中国

社会内部に通念として機能する論理すなわち伝統的価値観にある程度拘束された形で、いいかえれば主体的に社会にかかわる形で行わざるをえない。そこで毛沢東は、趙女士の対処策としては、望ましい順に「人格を有し生を得る」「奮闘して殺される」「自殺」「屈服」の四つがあったと述べ、「人生の自然法則」(すなわち求生の法則)に反する趙女士の自殺は、「ただ『人格の保全』の上で『相対』的な価値があった」と評している。このように、毛沢東にとって、自殺は否定すべきものではあっても、社会に反逆して人格を保全するという意味合いを含んでいる限りにおいて相対的に価値を認めることができたのである。ここには、自殺の必要ない西洋社会を理想としつつも(すなわち近代的人格の追求)、自殺せざるをえない中国社会における個人の反逆(すなわちロマン的人格の追求)に価値を見い出す毛沢東の二重の意識がある。それはまた、伝統的価値観を否定する西洋的価値観をもただちには受け入れることのできない存在の反映でもある。

三　ロマン的恋愛

毛沢東の議論の特徴は、その恋愛重視の立場にある。すでに述べたように、論争の口火は、趙女士の自殺を「自由に殉じ恋愛に殉じ」たと見る毛沢東の批評にあった。一連の論争において、旧式の婚姻制度(すなわち「父母の命、媒酌の言」)に対する批判にとどまらず「恋愛中心主義」を強く主張したのは毛沢東のみであった。それは、二五日の論文「恋愛問題――少年と老人」において表わされるが、二一日すでに毛沢東は『女界鐘』に寄せた論文の中で自説を展開している。

「趙女士自殺事件に関して」と題するこの論文において、毛沢東は、趙女士自殺事件を「人類の一個の公の事件」と捉え、「極端の個人主義や独身主義の主張の場合を除いて、誰もが注意し研究しなければならない」という。[21] というのも、「我が国数千年の正当ならざる礼教・習俗によって、女子はいかなる方面にあっても位置がない。政治、法律、教育から、職業、交際、娯楽、名分に至るまで、すべて男子と分かれて両様をなし、社会の暗がり、幸福を得ざるに退くのほか、なお多くの非人道的な虐待を受けている」からである。このように毛沢東は礼教・習俗がもたらす性差別を指摘し、女子が非人道的な虐待を受ける原因を前節で検討したように中国社会の特質性、いわば伝統中国的価値観に求めていた。この毛沢東の伝統的価値観への否定の意識は、男女の別なく交換可能な近代的個人を前提とする資本主義的生産様式への移行、いわば西洋近代的価値観によって現われるものとも言えよう。では、毛沢東は伝統的価値観を否定する西洋的価値観の思想的立場に立っているのであろうか。

毛沢東は、趙女士自殺事件に見るような惨事が発生しないための「抜本塞源の方法」を提示すべく、まず女子が制限を受ける理由について考察を行なっている。ケイト・ミレットの『性の政治学』によれば、「性の政治の理論」はイデオロギー的、生物学的、社会学的、階級的、経済的・教育的、暴力的、人類学的、心理的の八つの基盤に分類される。[22] このミレットの分類を借りるならば、毛沢東はイデオロギー的基盤と生物学的基盤の二つの基盤に照準を合わせた。すなわち、気質について男性優位の合意を形成する支配のイデオロギー性と、体力について男女の区別を行なう生物学的な相違性の二点に着目している。毛沢東は、女子の欠陥として表面的には、情に富む反面、知識と意志が劣っているという「心理」的な側面と、身体が弱く、纏足による歩行の困難（その実、これは纏足という暴力的基盤による）という「生理」的な側面とがあるが、女子の心理作用は男子とあまり異ならず、各国の教育は性による差異がないことを証明しており、また生理的な側面での二つの欠陥は習慣によるものである、と述べている。そこで、根本的な欠陥を生理的な側面で求めるとすれば、それは出産問題である、と毛沢東は述べている。

次に毛沢東はこの問題を恋愛と経済の関係から説明している。毛沢東は、「男女の関係は、現代の主張によれば、『恋愛』を中心にすべきで、『経済』に支配されてはならない。現代の主張が『経済は各自独立、恋愛の子は公共』とする所以である。現代以前ならばそうではなく、いわゆる『恋愛神聖』の道理があることを知らない。男女の間に恋愛はただ付属とみなされ、中心の関係はなお経済にある。資本主義に支配されるのである」と、まず「現代」と「現代以前」とを恋愛と経済の関係から対比させている。その上で、「上古の世」から「現代以前」への転換の原因について次のように説明している。すなわち、上古の世には食物の入手が容易であったため男女は平等であり、男も女も相手に経済を求めることはなく、男女の求めるところは恋愛のみであった。しかし、人口が増加し食物が不足し生活の競争によって労働を重視せざるえなくなって女子は男子に征服される死期に至った、と毛沢東は述べている。ここで、出産問題が発生する。つまり、女子は出産の期間には労働できないために、男子は食物と交換に服従を女子に強いている。これが女子の解放されない原因である、と毛沢東は述べている。

このように毛沢東は、「上古の世」→「現代以前」→「現代」という歴史の推移を恋愛と経済の関係から捉えたのであった。毛沢東の言う資本主義は近代的な意味での資本主義ではないが、近代資本主義をも含め広く資本主義一般に対して批判的な立場に立つものと思われる。したがって、毛沢東は、伝統的価値観に対して否定的であるとともに、伝統的価値観

を否定する西洋的価値観にもまた否定的にならざるをえない、いわば否定の否定の立場に立っていると思われる。いいかえれば、哀退する伝統的価値観と、侵入する西洋的価値観の双方を受け入れることのできないロマン主義的な世界苦の中から第三の価値観を求めているのである。

しかし、それは「上古の世」という過去の理想社会にたちかえることではありえない。毛沢東の言う「現代」は「恋愛神聖」の一点において「上古の世」に通ずるものであるが、資本主義における女子の根本的な欠陥（すなわち出産問題）を毛沢東が提起していることから考えて、毛沢東は「現代」という近い将来に理想社会を追求していると思われる。このように、毛沢東の思想の内部構造には、伝統的価値観の衰退と西洋的価値観の侵入という現実状況を背景にして、その両価値観を否定する二重の否定の意識があり、それは過去（「上古の世」）を範型としつつも未来（「現代」）へと志向する作動原理を有している。これは過去ではなく未来に現在からの脱出口を見いだす「進歩的ロマン主義」の立場である。

そこで、毛沢東は、女子が男子の圧迫を受けないための「抜本塞源の方法」を次のように提示する。「（一）女子は身体が未成長の時には絶対に結婚してはならない。（二）女子は結婚前に自己の生活に十分な知識と技能を準備しなければならず、これが最小の単位である。（三）女子は自分で産後の生活費を準備しなければならない」。すなわち、①早婚を禁ずることによって家長権への反逆を表わし、②個人の自由意志を守るための経済的自立の条件を差し示し、③労働のできない産後の生活費を確保することによって家産制への反逆を表わしている。これら三つの条件に加え、児童公育の施設という社会的条件があれば、「恋愛中心主義の夫婦関係」は成立する、と毛沢東は述べている。これは、恋愛と結婚を結合するロマン的恋愛の主張であり、伝統的家族制度のみならず西洋的家族制度をも児童公育によって解体することで成り立つ新しい家族制度の主張であろう。

しかし、この新しい家族制度の主張は伝統的な恋愛観に通底してもいる。霊肉二元のキリスト教的価値観のもと西洋において恋愛は、一二世紀、貴婦人と騎士の間の宮廷風恋愛として結婚制度の枠外に生まれ、産業化・工業化の進展によって伝統的な家族制度が崩れゆく中、一八・一九世紀、市民階級の間において恋愛と結婚を結合するロマン的恋愛として再生した。中国の「恋」には、閨房内の恋（あるいは夫婦間の情）、未婚男女の恋（いわゆる才子佳人の物語）、遊女との恋、の三つのパターンがあると言われるが、毛沢東の主張する「恋愛中心主義の夫婦関係」はこれまでの中国には見られない新しい恋愛、すなわちロマン的恋愛の提唱である一方で、恋と性愛が結びついていた中国の伝統的な恋愛観への回帰でもあ

る。つまり、毛沢東の主張は、西洋流のロマン的恋愛の援用が伝統的な思考様式を示すことにもなるという二重の意味でロマン主義的な恋愛なのである。[23]

このような毛沢東の恋愛中心主義の立場による資本主義批判は、『大公報』紙上での一連の論争においても現われ、他の論者には見られない毛沢東独自の立場を形成している。毛沢東は、論文「恋愛問題――少年と老人」において、伝統的な制度・習慣と資本主義とを結びつけて捉え、それを恋愛に対立するものとして批判している。[24]

まず毛沢東は、少年と老人とは反対の位置にある、と述べる。そして、「衣食等の日常生活から社会国家に対する感想、世界人類に対する態度に至るまで、老人は総じて蕭瑟的、枯燥的、退縮的、静止的であって、その見解はつまるところ卑下、その主張はつまるところ消極である」と捉え、このような傾向をもつ老人と少年がともにいる大半の理由は、少年は老人に衣食を供給し、老人は少年に経験と知識を供給するという利害関係があるからであり、これは中国の制度と習慣が良くないために生まれた怪現象である、と述べている。いいかえれば、家父長制的な権力構造を生み出す中国の制度・習慣に対して少年の立場から疑問を投げかけようとしているのである。

『大公報』「研究」欄において論争が行なわれている間にも、趙女士自殺事件に関する世論は高まり、『大公報』への投稿は数十通をくだらなかった。その中には、毛沢東から見て、父母の干渉のみを問題とし事の本質に触れていないものもあった。このような議論に対して毛沢東は、少年と老人とが対立する立場にあることを生理上・心理上の欲望の相違から根本的に問い直そうとしている。いいかえれば、趙女士自殺事件の発生原因を婚姻制度問題に限らず広く中国社会の問題として提起しようとしているのである。

毛沢東によれば、少年と老人が根本的に異なるのは、生理面と心理面である。人間の生活は総じて言えば生理上・心理上の欲望の満足であり、欲望は性別・年齢・職業・信仰などの違いによって異なる。また欲望には食欲・性欲・遊戯欲・名誉欲・権勢欲（支配欲）など多くの種類がある。しかし、その中で、年齢による欲望の違いが最も顕著なものであり、また根本的な欲望は、現在を維持するための食欲と、将来を開発するための性欲であるが、両者のうち年齢の違いがあるのは性欲である。そして、性欲の表現は大体にして恋愛である、と毛沢東は述べている。このように、毛沢東はまず、生理と心理とが異なる少年と老人の対立点を恋愛という一点に集約する。

そこで、毛沢東は、次のように述べる。「この恋愛という問題を、少年はとても重く見るが、老人は意に介すには足らな

いと見る。元来、夫婦関係はまったく恋愛を中心としなければならず、その他のさまざまなことは付属である」、「いわゆる恋愛は、ただ生理的な肉欲の満足を有しているのみならず、なお精神的・社交的な高尚な欲望をも有している」。しかし、中国において嫁取りは、茶を入れたり飯を作ったり、豚を飼ったり犬を追いたてたり、紡いだり織ったりという奴隷労働と、子孫の存続という下等な肉欲生活（いわゆる性欲）のためであり、少しの恋愛の影もない。この奴隷労働は、恋愛ではなく「飯を食う」という一点に意を注ぐ老人に供するためのものである、と毛沢東は述べている。

そして毛沢東は、「茶を入れたり飯を作ったり等の奴隷労働は資本主義の結果である」と、中国の制度・習慣と資本主義とを結びつけて論じている。ここに、伝統的価値観と西洋的価値観という二つの価値観は、恋愛に対立する経済としての一つの価値観にまとめられ、両方向性の否定の意識は単方向性の否定の意識として表わされた。毛沢東は次のように述べている。「資本主義と恋愛は衝突の地位に立つ。老人と恋愛は衝突の地位に立つ。老人と資本主義は固く結合してひとつである。恋愛のよき友人はただ少年のみである」。このように、少年と老人との対立関係を説く毛沢東の思想的立場の背景には、伝統的価値観と西洋的価値観の双方に対するロマン主義的反逆がある。そして、毛沢東の主張する恋愛は、そのようなロマン主義的反逆としての意味合いをもったロマン的恋愛である。

四　婚姻制度改革

すでに述べたように、兼公は一五日、子女の婚姻には干渉しないという「徹底の覚悟」が父母の側に必要であることを説いていた。一九日毛沢東は、同じく「随意録」欄において、この兼公の言葉を引用し、自己の婚姻は自身で行なわねばならず、「父母代辦政策」は絶対に否認しなければならないという「徹底の覚悟」が青年の側に必要であるとの自己の見解を対比させている。[25] つまり、恋愛神聖の原理を担うべき青年が主体的に婚姻問題へ参加することを促している。前節で見たように論文「恋愛問題――少年と老人」において毛沢東は、少年が老人と根本的に対立する立場に立っていることを解明していたが、この論文のもうひとつの副題は「打破父母代辦政策」であった。毛沢東にとって、中国社会には、恋愛の主体である少年が父母代辦政策を打破すべく自ら婚姻問題に取り組まねばならない状況があったのである。いいかえれば、恋愛と婚姻の結合である。

しかし、この恋愛と婚姻の結合、いいかえればロマン的恋愛の主張は、裏返して言えば、毛沢東が婚姻制度自体を否定

してはいないことを表わしている。つまり、否定すべきは旧式の婚姻制度であって、それゆえ婚姻制度をいかに改革するかが問題となってくる。婚姻制度改革についての論争は、解決策についての論文投稿を歓迎するという、同じく一九日「随意録」欄での毛沢東による男女青年への呼びかけから始まった。[26] とはいえ、婚姻問題についての議論は、毛沢東から見れば、およそ三つの立場に分かれることとなった。まず第一に、自由結婚は中国の現状からすれば時期尚早であるとする筠園、緯文、不平らの議論。第二に、父母主婚制度（毛沢東の言葉によれば父母代辦政策）に反対する平子の議論。そして第三に、中国社会の根本的批判を行なう新城、毓瑩、柏栄、西堂らの議論、である。

毛沢東の呼びかけにまず初めに現われたのが第一の立場である。二〇日緯文は、「最新式の『自由結婚』の主張は中国の現状では用いることのできない「極端の改造」であるという立場から、結婚年齢をおよそ二〇歳以上に改定する、結婚相手は子女が自身で選び父母の鑑定を受ける、父母が結婚相手を選び子女が許可を与える、といった三つの折衷案を提示している。[27] 不平もまた、「少年男女が情感に動きやすい」ことを心配し、「父母が有力な参加人になる」よう述べている。[28] 二一日筠園は教育問題を提起している。[29] 筠園によれば、数千年伝わる父母主婚制度をにわかに改変するのは難しい。中国の現状では、第一に、男女交際の機会が極めて少なく、学校教育を受けている人の場合でも男女は隔絶している。第二に、男女ともに学問が養成されておらず、選択力が弱い。大学時代の学生結婚が見られるアメリカでもその大半は肉欲の関係であって離婚という結果に終わることになる、と筠園は自由結婚の弊害を指摘している。そこで筠園は、高等専門以上の学校を共学化するという学制改革と、舞踏会・音楽会などの男女交際の機会を与えるといった解決策を提示しているが、しかし、中国の現状に照らして、未成年者は学問の養成に専念させ、成年に達した男女の場合でも「父母の命、媒酌の言」は廃止しないと述べている。このように、第一の立場は父母主婚制度を完全には否定するものではなかった。毛沢東はこれらの議論を、「子女の婚姻への父母の干渉という一点について、なお多く両可の談に徘徊している」と評している。[30]

第二の立場は父母主婚制度に反対するものである。二二日平子は、父母主婚制度にあえて反対する男子はおらず、また女子も少ないと述べ、その理由として人民を束縛する中国の名教道徳を挙げている。[31] いいかえれば、「逆子の名声」を恐れさせる環境の圧力があるのである。平子は、環境を改造し新知を輸入してのち名教道徳の束縛を解脱できると述べている。毛沢東はこの父母主婚制度反対論に対して、「然る所以の真実の道理を述べていない」と評している。[32] 前節で見たよう

に、毛沢東は欲望の側面から「真実の道理」を解明していた。

第三の立場は、父母主婚制度にとどまらず中国社会を根本的に批判するものである。二二日柏栄は、趙女士自殺の原因を暗黒の専制的親権家庭制と自由意志のない売買的婚姻制に求め、この二つの制度を打破すべく言論人は万悪の社会と闘い、父母は「終身の大事」である婚姻を子女自身に任せる覚悟をし、青年男女は絶対に自己の婚姻に第三者の干渉を許さない覚悟をせよ、と述べている。[33] 柏栄にとって、自殺は無能力、屈服を意味するものであり、あくまで社会の中で「奮闘の精神」をもつべきことを説いている。二二日毓瑩は、結婚の要素はあくまで恋愛であると捉えた上で、売買的で専制的な婚姻制度と、男女の共学、社交の公開がない現在のどこから恋愛が生まれようか、と問題提起している。[34] 二三日新城もまた、婚姻制度改革の前提として社交公開の問題をとりあげ、まず女性教員の採用、学校の公開といった提案を行なっている。[35] 二四日西堂は、根本的な解決策は家庭組織の改良であり、兄弟のみならず父子の間でも分家を行ない大家庭を小家庭にすべきこと、また小家庭の場合でも夫婦不和の際には離婚してそれぞれ分家すべきことを説いている。[36] このように、第三の立場は、中国社会の根本的な改革を要求するものであった。毛沢東は、これらの議論が男女の隔絶について論及していることに対して、「すでに詳細に説明されており、私がかさねて牀を迭え屋を架す必要はない」と述べている。[37]

以上のように、毛沢東が婚姻制度改革について論じる際には、自由結婚の導入に否定的なもの、父母主婚の制度に対して否定的なもの、中国社会自体に否定的なもの、の三つの立場が現われていた。この三つの立場に対する毛沢東の批評からも明らかなように、毛沢東の立場は、父母主婚制度のみならず中国社会を根本的に批判する第三の立場に近い。では、批判の照準を社会に合わせロマン的恋愛を主張する毛沢東自身はどのような議論を展開しているのであろうか。いいかえれば、その作動原理は何か。すでに述べたように、毛沢東は父母代辦政策を打破すべく論文「恋愛問題——少年と老人」を書いていた。そこで次に毛沢東は二七日、「父母の命、媒酌の言」の儒教的価値観をつきくずすべく、もうひとつの攻撃対象である媒酌人制度について論文「打破媒人制度」を書いている。[38] このように、毛沢東の議論はまず、儒教的価値観が生み出す制度への徹底的批判へと作動する。

毛沢東はまず中国社会を「技術の社会」と捉え、婚姻にかかわる小技術——爬灰（息子の妻を犯す）、盗嫂（兄嫁を盗む）、養漢（間男）、争風（やきもち）、帯緑頭巾（私通の黙認）、使仙人跳（美人局）など——の上にあって大技術と呼ぶべきものこそ媒酌人であると述べている。毛沢東によれば、媒酌人は「うまく引き合わせる」ことを根本の主義とし、十分の

八以上は虚言を弄し「神」と「八字」(干支による生年月日時の占い)を護符としている。毛沢東は、「中国の婚姻上で大権を操っているのは、人はみな父母であると言うが、その実、父母は主宰の名を有しているけれども決定の実がない。決定の大権を有しているのは媒酌人である」と、婚姻制度の根本的な問題点を父母代辦政策よりもむしろ媒酌人制度に求めている。したがって、この点でも毛沢東は一連の論争の中で独自の立場に立っていた。

しかしながら、婚姻制度改革についての毛沢東の議論は、父母代辦政策と媒酌人制度の打破という儒教的価値観に対する批判にとどまらなかった。毛沢東はさらに二八日、論文「婚姻上の迷信問題」において、一般民衆に浸透している迷信に対する批判をも行なっている。[39] 毛沢東によれば、いわゆる礼教を真に理解しているのは一部の「読書君子」であり、それ以外の婦女や農工商の民、つまり大多数の人々は少しの知識もない。にもかかわらず、「父母の命、媒酌の言」という儒教的価値観によって、「人生のきわめて重大な要求」にして「勢力また非常の大」なる恋愛が阻害される原因は別のところに求められなければならない。毛沢東はそれを迷信に求めている。このように、毛沢東の議論は次に、儒教的価値観を下から支える迷信、すなわち、社会への反逆を担うべき主体である民衆の意識の内部へと作動する。

毛沢東によれば、最大の迷信は「婚姻命定説」である。すなわち、母親の腹から生まれ落ちるや婚姻はすでに定まっている。長じて結婚したくなると自身で相手を選ぶことなく父母や媒酌人にまかせる。どのみち相手はすでに定まっているのである。こうして、恋愛という自然の勢力にあらがえない人を除いては、閨房のうち夫婦相殺し合う戦場となるか、桑間濮上に別天地を求め「秘密恋愛」を実行することとなる。それ以外の多くの仲睦まじい夫婦は「婚姻命定」の四字を脳裏に充満させている、中国社会ではこのような婚姻命定説による婚姻がおよそ十分の八を占めている、と毛沢東は述べている。しかし、「婚姻の中心は恋愛である」、「婚姻成立の後、夫婦の間に恋愛を充満させなければならない」とロマン的恋愛の立場に立つ毛沢東にとって、このような仲睦まじい夫婦は婚姻命定説のもたらす虚飾の姿でもある。毛沢東は、「この十分の八の夫婦は、その恋愛の滋味が『莫名其妙』の中にある」と述べている。

この婚姻命定説という「総迷信」に多くの「小迷信」が付随すると毛沢東は述べ、「合八字」、「訂庚」、「択吉」、「発轎」、「迎喜神」、「拝堂」の六つを挙げている。趙女士の婚姻の例では、「拝堂」以外を経過しているので、その死についてもこれらの迷信が大きく関係しているであろう、と毛沢東は述べている。それゆえ毛沢東は、婚姻制度改革の問題について、

婚姻にかかわる迷信（とくに婚姻命定説）をまず打破しなければならないと主張している。そして、「この婚姻命定説がひとたび打破されれば、父母代辦政策はたちまち護符を頓失し、社会上ただちに『夫婦の不安』を発生させることができる。夫婦にひとたび不安が発生すれば、家庭革命軍が麻のごとく起こることができ、婚姻自由、恋愛自由の大潮がひきつづいて中国大陸に氾濫するであろう。潮に乗って舟を漕ぐ新夫婦は恋愛主義の上に完全に成立できる」と、毛沢東は婚姻命定説の打破によって中国社会が緊迫的かつ全面的に改革され恋愛主義が達成されると捉えている。このように毛沢東は、迷信に照準を合わせることによって知識人のみならず一般の民衆をも視界に収めた婚姻制度改革論を行なっており、外部的な制度批判にとどまらず内部的な意識を問題にするがゆえにこそ、他の論者とは異なる独自の、そして急進的な立場に立っていたと思われる。

五　おわりに

論争というものが持つ性格なのかもしれないが、趙女士自殺事件をめぐる一連の論争においても、各論者は共通の妥協点を見い出すことなく論争は終結した。もちろん、旧式の婚姻制度を改革する必要があるという点では各論者ともに認識を一致させていたが、婚姻制度改革の程度や方法については各様の議論が展開されたのである。しかし、それゆえにこそ、妥協の必要ない思想の次元において自由な議論が確保されたとも言える。論争を通じてかえって明らかとなるのは、各論者の思想的立場の位置関係である。最後に、毛沢東の思想的立場をまとめておこう。

趙女士自殺事件をめぐる論争において、毛沢東の思想的立場は個人にではなく社会に対する批判を行なうものであった。しかしながら、この毛沢東の立場は同時に社会に反逆する個人の奮闘を要求するものでもあり、ここには西洋社会における近代的な自我を理想としつつも中国社会の内部で問題の解決策を模索しなければならないという、ロマン主義的な自我の探究があるように思われる。

恋愛と結婚を結合する毛沢東の思想的な立場はまたロマン的恋愛の追求と言うことができる。しかも、毛沢東の独自性は、伝統的社会への批判と資本主義批判とを結びつけているところにある。ここには、哀退する伝統的価値観のみならず侵入する西洋的価値観をも受け入れることができず、第三の価値観を求める「進歩的ロマン主義」の思想的立場があると思われる。

ロマン的恋愛は婚姻自体を否定するものでなく、したがって婚姻制度の改革に議論の焦点は移るであろうが、毛沢東の

思想的立場は、「父母の命、媒酌の言」という儒教的価値観に拘束される知識人のみならず、文字を読むことのできない一般の民衆をも含めた形で家庭革命を構想している点にある。ただし、それは現実の民衆ではなく毛沢東の期待する理想の民衆であるかもしれないが、またそうであるがゆえにこそ、婚姻制度改革の問題として社交や教育の改革をとりあげる漸進的改革の立場とは異なり、毛沢東は全面的かつ急進的にロマン的恋愛を追求する立場に立っていたと思われる。

註

(1) 「新娘輿中自刎之惨聞」『大公報』一九一九年一一月一五日。

(2) 「趙五貞自刎案之真象——趙海楼所述」『大公報』一九一九年一一月一九日。

(3) 「新娘自刎案之余聞」『大公報』一九一九年一一月一七日。

(4) たとえば、Roxane Witke, "Mao Tse-tung, Women and Suicide" in Marilyn B. Young ed., *Women in China : Studies in Social Change and Feminism*, The University of Michigan, 1973, pp. 7-31, 中山義弘「毛沢東の婦人観」『北九州大学外国語学部紀要』第二八号（一九七六年）一—二八頁、五四運動時期の女性解放について、同「民国初めにおける婦人解放論」『大下学園女子短期大学研究集報』第八集（一九七一年）八五—一〇四頁、同「五四運動における女性解放の行動」、同「五四運動期における女性解放思想」（上下）『北九州大学外国語学部紀要』第三二号（一九七七年）七三—一二三頁、第三五号（一九七八年）一—二六頁、第三六号（一九七九年）一—三四頁、同「五・四期の女性解放運動」、末次玲子「中国農村における婦人の状態」野沢豊・田中正俊編『講座中国近視代史4五・四運動』（東京大学出版会、一九七八年）所収、一八一—二〇九頁、二一一—二四四頁、小野和子「五・四運動時期の婦人解放思想——家族制度イデオロギーとの対決——」『思想』五九〇号（一九七三年八月）一〇三—一二〇頁、同「家とは何か——五・四運動時期における結婚論を中心に——」『東洋史苑』一一号、同『五四時期家族論の背景』（京都大学人文科学研究所共同研究報告「五四運動の研究」第五函15）同朋社、一九九二年、中国女性史に関するものとして、岸辺成雄編『儒教社会の女たち』、『革命の中の女性たち』評論社（世界の女性史16、17）昭和五二年、五一年、小野和子『中国女性史——太平天国から現代まで——』平凡社、一九七八年、中山義弘『近代中国における女性解放の思想と行動』北九州書店、一九八三年、ジュリア・クリステヴァ『中国の女たち』丸山静・原田邦夫・山根重夫訳、せりか書房、一九八一年、J・ステイシー『フェミニズムは中国をどう見るか』秋山洋子訳、勁草書房、一九九〇年、陳東原『中国婦女生活史』台湾商務印書館、一九二七年、劉巨才『中国近代婦女運動史』中国婦女出版社、一九八九年、参照。

(5) 初期毛沢東の思想を「進歩的ロマン主義」と捉えたものとして、拙稿「初期毛沢東のロマン主義」『筑波法政』第一六号（一九九三年三月）、「初期毛沢東と国際関係——文化的世界主義から政治的世界主義への条件」『社会文化史学』第三一号（一九九三年一〇月）、参照。

(6) 天籟「旧式婚姻之流毒」『大公報』一九一九年一一月一五日。天籟は不詳。

(7) 兼公「改革婚制之犠牲者」『大公報』一九一九年一一月一五日。兼公は龍彝（一八八八—一九五一）、湖南湘潭の人、『大公報』主筆。

(8) 毛沢東「対于趙女士自殺的批評」『大公報』一九一九年一一月一六日。

(9) 兼公「我対于趙女士自殺的雑感」『大公報』一九一九年一一月一七日。

(10) 毛沢東「趙女士的人格問題」『大公報』一九一九年一一月一八日。

(11) 「強姦」の比喩はすでに兼公が行なっているが、毛沢東はそれを「間接強姦」と言い表わした。

(12) たとえば、「昏礼者、将合二姓之好、上以事宗廟、而下継後世也、故君子重之」(礼記・昏義)。さしあたり、満鉄調査資料『支那に於ける家族制度』南満洲鉄道株式会社、昭和三年、参照。この場合、個人主義的な婚姻制度は夫婦関係中心の家族制度を意味し、家族主義的な婚姻制度は親子関係中心の家族制度を意味する。親子関係中心の家族制度を維持するための思想的基盤である孝道について、桑原隲蔵『中国の孝道』講談社学術文庫、一九七七年、参照。

(13) 毛沢東のこの言葉は、すでに天籟も用いていた。アメリカ独立戦争時、パトリック・ヘンリーの演説の一句か。

(14) マンハイム『歴史主義・保守主義』森博訳、恒星社厚生閣、一九六九年、一三〇頁、参照。また、磯田光一『増補比較転向論序説——ロマン主義の精神形態——』(勁草書房、昭和四九年)では、「ロマン主義は啓蒙的合理主義の反措定として出現するが、それにもかかわらずロマン主義は啓蒙的合理主義の申し子という側面ももっているのである」(二六七頁)、「『ロマン派』=近代的個人主義』説は、ロマン派の詩人の社会的位相を見たばあいに発生するのであり、『ロマン派』=反近代的全体主義』説は、ロマン派の夢ないし思想体系の構造および内容を中心にして考えるとき発生する」(二六八頁)と述べられている。本稿の問題設定も後者、あるいは毛沢東思想の内部構造と作動原理にある。

(15) 殷柏「対于趙女士『自殺的批評』的批評」『大公報』一九一九年一一月一九日。殷柏は彭璜(一八九六—一九二二)、湖南湘郷の人、新民学会会員。

(16) 汝霖「我対於趙女士自殺案的主張」『大公報』一九一九年一一月一九日。汝霖は蕭汝霖(一八九〇—一九二六)、湖南桃源の人。

(17) たとえば、「娶妻如之何、必告父母」(詩経・斉風)、「取妻如何、匪媒不得」(詩経・豳風)、「不待父母之命、媒酌之言、鑽穴隙相窺、踰牆相従、則父母国人皆賤之」(孟子・滕文公下)。

(18) 毛沢東「『社会万悪』与趙女士」『大公報』一九一九年一一月二一日。

(19) 毛沢東「非自殺」『大公報』一九一九年一一月二三日。

(20) 価値剝奪に対する補完としての権力追求については、H・D・ラスウェル『権力と人間』永井陽之助訳、東京創元社、昭和三六年、四九頁以下、参照。

(21) 毛沢東「関于趙女士自殺事件」『女界鐘』特刊第一号、一九一九年一一月二一日。竹内実監修『毛沢東集補巻 第九巻』蒼蒼社、一九八五年、所収。

(22) ケイト・ミレット『性の政治学』藤枝澪子他訳、自由国民社、一九七三年、六九頁以下、参照。

(23) ロマン的恋愛については、Hugo G. Beigel, "Romantic Love", in *American Sociological Review*, Vol. 16, no. 3 (1951 June), pp. 326-334, Nathaniel Branden, *The Psychology of Romantic Love*, Bantam Books, 1981, Dwight Van de Vate, Jr., *Romantic Love : A Philosophical Inquiry*, The Pennsylvania State University Press, 1981. 参照。宮廷風恋愛については、アンドレアス・カペル

ラヌス『宮廷風恋愛の技術』野島秀勝訳、法政大学出版局、一九九〇年、参照。中国については、張競『恋の中国文明史』筑摩書房、一九九三年、参照。

(24) 毛沢東「恋愛問題——少年人与老年人——打破父母代辦政策」『大公報』一九一九年一一月二五日。

(25) 毛沢東「婚姻問題敬告男女青年」『大公報』一九一九年一一月一九日。

(26) 毛沢東「改革婚制問題」『大公報』一九一九年一一月一九日。

(27) 緯文「婚制改造問題」『大公報』一九一九年一一月二〇日。緯文は不詳。

(28) 「趙女士自殺案的『世論』」に抄録された不平の投稿。一九一九年一一月二〇日。不平は不詳。

(29) 筠園「我的改革婚制談」『大公報』一九一九年一一月二一日。筠園は不詳。

(30) 毛沢東「恋愛問題——少年人与老年人」『大公報』一九一九年一一月二五日。

(31) 平子「我不賛成父母主婚」『大公報』一九一九年一一月二二日。平子は張平子（一八八五—一九七二）、湖南湘潭の人、『大公報』主筆。

(32) 毛沢東「恋愛問題——少年人与老年人」『大公報』一九一九年一一月二五日。

(33) 柏栄「我対於趙女士自殺後的意見」『大公報』一九一九年一一月二二日。柏栄は李柏栄（一八九三—一九七二）、湖南邵陽の人。

(34) 毓瑩「一個問題」『大公報』一九一九年一一月二二日。毓瑩は龍伯堅（一八九九—一九八三）、湖南攸県の人。

(35) 新城「革改婚制先決的一個問題」『大公報』一九一九年一一月二三日。新城は舒新城（一八九三—一九六〇）、湖南溆浦の人。

(36) 西堂「論趙女士自殺事」『大公報』一九一九年一一月二四日。西堂は李蕭聃（一八八一—一九五三）。

(37) 毛沢東「打破媒人制度」『大公報』一九一九年一一月二七日。

(38) 同右。

(39) 毛沢東「婚姻上的迷信問題」『大公報』一九一九年一一月二八日。

［付記］本稿作成にあたって筑波大学学内プロジェクト研究（奨励研究）からの助成を得た。記して謝意を表わしたい。

（筑波大学準研究員）